

[別紙2]

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 HANSON, ENDRA KUSUMA

居住環境への愛着は人間に重要な影響・効果をもたらすものの、客観的に愛着のメカニズムや愛着に関わる要因を検討した研究例は少なく、愛着を扱った研究でもその成果が一般化できていない、多数の要因が系統的に整理されていないなどの問題を抱えている。そのような状況の解決のため、愛着に関わる要因を検討し、愛着とその要因との因果関係を体系化・構造化することを目的としたものが本研究である。

研究の流れとして、まず予備調査において、最も愛着のある環境が住居と居住地域という事実を見出し、また既往研究を参照した上で、住居と居住地域を調査対象として定めている（第1章、第2章）。

次に、多数の愛着に関わる要因のうち未知の要因を把握するために自由記述による調査を行っている（第3章）。既往研究から抽出した要因を加え、時間的先行性や因果的処理過程により要因を分類し、実態⇒評価・イメージ⇒愛着の判断⇒結果という因果的構造を仮定した上で愛着構造仮説モデルを作成している。この中で、実態に属する特性を人間側特性、人間・環境系特性、環境側特性の3つのグループに、実態からの影響を受ける情動的なプロセスに関わる評価を感情的評価・イメージ、認識と関わる評価を認知的評価・イメージと分類している。そして、感情的評価と認知的評価が愛着に直接影響を与え、愛着を持つことにより感情的効果、認知的効果と行動的效果をもたらすと仮定している。

このモデルをベースとして、主として評定尺度を用いたアンケート調査を実施し、データの分析を行い、愛着と要因関係の検討を行っている（第4章）。まず、居住環境で一般的に行われる行動のうち、交流及び対人コミュニケーション、娯楽・余暇と日常的行動を抽出している。そして、居住地域での地域の人との交流、仲間と一緒にする行動、住居での家族との団らんといった人との交流、家族とのコミュニケーション行動などは愛着との因果的な関係が強いことを導いている。また、居住地域での娯楽・余暇行動が、日常的行動に比べて愛着とつながりがあることを見出し、日常的行動が特に感情や認識に印象が残らず変化も与えないのに対し、交流、娯楽、余暇は心理的、認知的変化や満足感を与えると考察している。

次に、居住地域において、遊びや散歩できる場所の有無、地域の景観、緑地や自然、町の大きさ、行事や文化財、町の活気などを、人間の感情的及び認知的レベルの要求に関係するものであるため魅力的特性とグルーピングし、一方、安全性・衛生、利便性に属している必要不可欠な要因を当り前特性とし分析を行っている。その結果、魅力的特性の存在は当り前特性の存在よりも愛着につながりが強く、魅力的特性に関しては満足すればする

ほど愛着が増すが、当り前特性に関して満足しても愛着に結びつかない傾向を導いている。また、住居の場合でも、個人スペースや住居の間取り、明るさ、日当たり、風通しのような環境的快適性、窓からの見晴らしや室内の内装、雰囲気や家の外観といった魅力的特性は、犯罪からみた安全性、地震、火災、水害などの災害に対する家の安全性といった当り前特性より愛着とのつながりが強いことを導いている。

一方、居住環境に思い出があるほど愛着が増すという傾向、また、居住地域及び住居が自慢できるほど愛着が増すという傾向を見出し、愛着がある場合、自分の物という感覚につながり、また自分の住まいだという実感と愛着との相関が強いことを示すなど、思い出という環境と人間との関わり、自慢と所有感という認識的イメージと愛着との関係を説明している。

また、住居に愛着を持つことによる得られる最も大きな効果として、気分をリフレッシュすることや穏やかな気分になること、すなわち、住居に愛着を感じる、愛着を感じる住居があることが精神的安定性をもたらすという傾向を導いている。一方、居住地域においては、愛着を持つことにより居住環境を維持する意志という認識的効果と住み続けるという行動的効果をもっとも大きな効果であることを示している。

さらに、具体的な詳細な関係を見るために観測変数と潜在変数の関係を視覚的に表示可能な共分散構造分析によりデータの分析を進めている（第5章）。そして、居住地域および住居における人間・環境系特性と愛着と効果、居住地域および住居に対する認識的評価と愛着と効果などの観点から、現時点で最も妥当だと思われる因果モデルを導出している。最後に、第4章、第5章における愛着のメカニズムの結果などを総合的にまとめ、愛着構造モデルを作成している。これは、愛着構造仮説モデルを検証した成果でもあり、図式的には、愛着と有力な関係のある要因を用いて、要因と愛着間関係を位置付けしたものである。

以上のように、居住環境に係わる複雑な要因を、愛着という根源的な概念を軸にして系統的に整理したという点で画期的な研究であり、学術のみならず実務領域においても、今後の建築学に対してその知見の寄与するところは大きい。また、環境評価に関連する既往研究の位置付けも同時に行ったという点も特筆できるものである。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。